

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

令和元(2019)年
11月号
通巻591号
毎月23日発行
(題字 矢追日聖)

★発行日 令和元年11月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)45-1192
★印刷 大倭印刷 監製
★定価 1部 250円
年間購読料3,000円(送料共)
★郵便振替 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



F I W Cのキャンパー達に話す法主さん

撮影者不詳(文・1頁)

昭和39(1964)年4月5日 学生達への話から

大倭とF I W Cの出会い — ^{むすび}交流の家建設始まる(上)

於：旧拝殿

法主 矢追日聖 (満52歳)

はじめに

録音日時がはっきりしなかったのだが、法主様の昭和39年4月5日の日記に、欄外に「F I W C解散」"学生達の集会を八ミリにて撮る"とあり、「天気はよい。大本宮の桜も三分咲きはじめる。八重桜も赤い色を見せている。日元は庄山へ屋根瓦の修理に出る。学生達は右往左往、あとの整理をしていた。午後、拝殿に集合、押川リーダーが一時半、呼びに来る。約三十分程、学生達の質問に答えて話をする。五十名程、半数は未知の学生であったため、この施設を、この地に承認した心境と、大倭の内容についてであった。一同非常に喜んでいった。あとからすず美と房子が来た。志津女と道代は大抵参加していた。鈴月(かあさん)も喜んで聞いていた。女性達は宗教に関心があるらしく、側に来て何かと聞かれた。四時頃、(瑞光)庵に上がった」と書かれていたのが、それらしい。

フレンズ国際労働キャンプ(F I W C) 関西委員会発行の『交流の家運動50年史』を対照すると、1964年3月25日〜4月5日の春のロングキャンプで、建設用地を整地した折のものであることが分かってきた。

表紙写真は、先日偶然、交流の家で見つけたものだが、どうもその時のものらしい。後ろに柴地則之さんの顔が見える。柴地さんはその年の6月15日付で入門し、紫陽花邑人となる。

(編集部)

いじには何かある

柴地則之…ライ回復者の宿泊施設建設について
法主さんに相談したら(※前年の昭和38年9月23日)、一も二もなくそういう仕事であれば是非一緒にやりましょうというお返事でした。ここは光明皇后の時代から救ライ運動をやっている、ライとは非常に結びつきが強い。(※今日ではハンセン病というのがライの正式な用語となっているので、以降はそれに準ずる)

ただハンセン病回復者の人達だけが泊まるというのでは、特殊化しすぎてまずいから、大倭に見えた方々も一緒に泊まれるような宿泊施設にしようというお話でした。僕はそれを聞きまして、ここには何かあるな、と。日本の思想はこれまで非常に遅れた排外主義的なものとして批判されてきたが、もっと奥の方をたどれば、ちょっと政治とは関係ないけれども、ハンセン病や差別に関わる問題に対して有効なエネルギーを持つ思想があるのではと感じたわけです。

もう一つ、ここは共同体、共同社会を作っておられます。その原理が大倭教の中から流れてきていると感じるわけですが、それを支持するとかしないとかそういうことと関係なくお話を聞いてみたかどうかと、こういう機会を設けました。ハンセン病の問題に対して、すらすらと「うちは土地がありますから出しましょう」と言える思想の根は何かということですね。

差別に対する考えなどを中心に伺えたら非常に有難いと思います。

法主…大倭教の教祖さんとか言われたら、こそばゆいです。大体頭の古い人達は、教祖さんというような存在をおだてあげて何か信仰している気

になるんですね。神さん仏さんらしく御簾の内に入っていないければ恰好つかんような存在になります。しかし私だってメシ食うてシヨンベンもしているのだから、人間としてあなた達と同じことですわね。その点、あなた達はぎつくばらんで正直だから、信者が教祖さんとか何とか言うのを聞く嫌になつてくるんです。

私はいつもどんな人が見えても前掛けをしてるんです。大もじゃれてきたりして汚れますからね。初めて見えた人は、教祖さんやから金びかの着物でも着ていると思っているかもしれないけど、そんな恰好でばさばさ一と出て来るから、「教祖さんどこにいてはりますねん」ということがよくあるんです。(笑)

皆さんと学校の先生達との関係のように、年の功とか飯を食っている年数が多いというだけの大先輩だという意味で尊敬してもらったらそれでいいと思うんです。頭の中はあなた達の方が新しいし、我々はもう白髪が生えてきて、頭の内容は話にならないのでね。

自分なりに持っている行き方

普通は、大倭教の教義は何かと一番先に聞かれますけど、くすぐったい気がする。大倭教の教理はかくかくしかじかなんて言いたくないんですよ。今日までに既に先覚者とか聖人とか、偉い人達が言葉や文字を尽くした書籍がある。それを見れば今さら私が新しく大倭教の神さんの教えはこうだとか、なんぼ喋って書いたって及ばないんですよ。例えばお釈迦さんやキリストさんや、哲学者などの言葉もあるし、私から聞かなくてもそんなものを読んでおいた方がましなんです。

けれども今の時代に生きておる中に、自分が自

分なりに持っているものがあるんです。私は本を読むのは嫌いな方ですね。自分の好きなことだけやって、それ以外のことはほとんど勉強しなかった。今、宗教でやっていますけれど、宗教の教理を勉強して、ある程度自分で悟りを持って大倭教を作っているんじゃないんです。この宗教的な感覚は、本を読んだり人の説教を聞いたり、そんなところから出てきているものじゃない。私なりに持って来た一つの宗教的な行き方なんです。

大学の六年間は考古学ばかりやっていたんです。文学はあまり好かないし、語学ときたら英語の辞書なんかろくに読んだことあらへん。私の学生時代は昭和三年から九年で、思想的には左翼と右翼がはっきり分かれていた時代でした。社会主義的な中庸を行くような穏やかな左翼ではないし、テロをやるくらい極端な右翼だしね。

考古学というのは徹底した唯物主義で、古代の文化を遺物や遺跡を通して観察していくという実に頭の固い学問なんです。ところが宗教は唯心的ですからね、今は正反対な行き方をしております。今日まで、なぜ自分の人生を宗教一本で打ち込んできたかというところには、自分なりに持っているものがあつたんです。宗教で一生身を立って終わっていくというのは、十六か十七くらいの歳にはつきり決めていました。

そういう頃から出発しているんですが、私は宗派・教派とは全然無関係で、出家したことも洗礼を受けたこともない。私には宗教関係の先生はおりません。

私の宗教へ入る根本は、世の中というのは何でこんな不幸や差別があつて住みにくいのか、どうすればお互いに気を許し、将来を心配しないで楽に生活していけるかというようなことなんです。

この世の中が少しでも平和に、もう少し我々が住みやすい社会にならないかと、政治改革でもやったらかと思えたこともあるんです。しかし、それよりもっと深いものでなければならぬと宗教に入りました。未だに微力ですけども、こつこつとやっているんです。

だから根本精神というものはヒューマニズムというか、そういうところに接近した宗教的な行き方をしている。

排他主義的な考えは好まない

大倭教はこうであるというような、他の宗教と異なった教えは何にもない。宗教というのは、宗派・教派よりも、お互いに宗教心をしつかり掴むことが目的です。宗教心を養う意味では、キリスト教だろうが仏教、神道、道徳、どんな方法でも構わない。私が言う宗教の心とは、自分だけじゃなく自分も他人も皆が幸せに暮らしていける心を持つという意味です。

そういう心になるためには、色んな修行の仕方や悟り、あるいは物の考え方があって思うんです。仮に社会主義や共産主義、昔の日本の国家主義にしても、どんな主義でも構わないんですよ。その主義が本当に社会の皆が穏やかに生活出来る一つの主義主張であれば、それは非常に結構だと思つて。私は昔から排外主義的な考えは好まないんです。共産主義者でも心安うなれば、社会主義者も好きだし、歪んでも真つ直ぐでも構わない、一つの主義に生きるという生き方は非常に好きなんです。

その良し悪しは結果論ですから、共産主義は今の日本社会ではあまり受け入れられないけれど、それで皆が幸せになるなら非常に結構なんです。

社会主義や国家主義、家族主義、どんな主義でもどこかに良いところがあるんです。けれども無下に食わず嫌いで、好きだとか嫌いだとか、日本人は割合、排他主義的な気持ちが多いように思うんですね。まず色眼鏡をかけないで素直に物を見る心を養うこと。排他主義的な島国根性を直さなければ、日本自体が平和にはならない。

自分の家の行き方というものも分からないくせに、隣のことがばかり構いに行く。または一人が話題になれば、その人の悪いところばかり言うというように、隣で何かあればもうその晩の話題になっている。嫌らしい日本人の根性ですね。あなた達の時代は知りませんが、私達の時代はそうなんです。

そういうところから直していくには、一つの信仰というか宗教を持つていけば、かなり効果があるんじゃないかというのが私の現在の行き方です。まあお互いに話としては分かっているけども、実行となるとなかなか出来ないんですね。

大倭教という一つの教団に見えるようなものを持つてはありますが、いかなる宗教団体に対しても排他主義的な行き方は、私は今日まで絶対していません。大倭に見える人の中には色んな方がおります。例えばキリスト教の教会に行つておられる人、坊さんも神主も見えます。最近は創価学会の人や沢山お越しになりますし、とにかく多色彩の人が寄り集まっておるんです。こういう特殊な宗教団体は日本でも少ないと思う。

宗教の教えというのは、普通、自分の宗教に入ることで助かるんだというように我田引水なんです。と同時に、宗教や信仰に入る動機が、必ず現世利益と引き換えでね。まず自分の欲心で入つて、その要求が叶えられたら、その神さんは立派だとか、その宗教は結構だとか、病気が治るなら

その宗教に入ろうやないかとか言う。これはもう欲の塊ですね。宗教を扱っている人達が、宗教があるためにかえて人を不幸に導いていく実例がざらにあるんです。

宗教に入つて不幸になった人が、大倭へ来ていることもある。それは指導者の問題ですから、私は排他主義とか差別とかいうことに関して、今まで本当に平等に見てきています。

空いている所へ建てたらいい

柴地さんがこのあいだ無菌のハンセン病回復者の宿泊施設の問題を持って来られた。その時、態度は実に深刻なんです。私は一体どんな問題を持つて来たのか、地球でもひっくり返るんかなというようなつもりで聞いた。緊張して「ちょっと先生にお話がありますねん」とか言うしね(笑)。えらい大問題を持って来るんだと思つて、こっちはその気持ちで聞いた。

ところが、無菌のハンセン病回復者の人達が旅行した時に宿泊するような施設を作りたいので、土地を提供してもらえないかという話なんです。仕事はワークキャンプの人達がして、以前にワークキャンプをしたことがあるスラム街の廃材も利用するとか具体的な話をしておられた。

私は、若いのに立派なことを言うな、我々年寄りでもさっぱり気がつかないのに、学生というのはそれだけ理解が広いんだなと非常に敬意を表して聞いておつたんです。初めは、ハンセン病の人達が集まって生活する場所とか、そういう相談かと思つていたんです。ところが、一時的な宿泊の建物だということで、そんな問題ならおやすみ話やないか。空いている所へばんと家を建てたらいいんで、そんなものは何でもいことやと

たんです。

こっちはあんまり深く考え過ぎて、ハンセン病の人達の生活を一生看る施設か何か作るんだと思っただけです。それには敷地も大分要るし、費用は相当かかるし、政府は応援しないだろうし、重荷やなど深刻に思っただけですよ、一応は。あんまり大きく考えすぎたところが、聞いていたら段々軽い話だとわかったのですね。何やそんなことだったらいつでもやろうやないですかと言うたんです。(笑)

その時、無菌のハンセン病回復者という言葉を使うことと自分が間違っていると思っただけです。無菌であるという証明ができれば、これはもう、いわゆる身体障害者のような扱いをしたらいいんです。やっぱり指のない人や身体が崩れた人もおるんですから、身体障害者と同じ立場です。ハンセン病なんて言葉を使ったらいかんやないか、とにかくそんな一時的な宿泊施設だったらここで建てたらええと柴地さんに言うたんです。

そのかわり、建物そのものが無菌のハンセン病回復者だけの宿泊施設というふうなことになる、世間がそれに対して色んな批判や敬遠も差別もするからね。大倭に人が見えた場合に、誰もが集会したり宿泊したり、広く社会の皆が使用出来る施設に持って行ったらどうか。大倭の方からも出来るだけ手伝いをしようやないかという話をしたんです。

私は宗教の世界で三十年飯を食っているわけですが、日本の宗教家という人でも、口では神仏の心とか言っているけど、実際にそんな問題にぶつかると腹の底には案外、差別が流れておるのが一般的だと思うんです。それに宗派・教派の人の頭は、徹底的な我田引水なんです。自分の宗教対他宗教という対立的で排他的な気分を持っている。

一般社会の人は宗教家から見てお得意先で、一人でも多く信者を獲得しようとするし、実業家の得意先の取り合いみたいなものになっています。だから私は宗派に囚われたり、宗教という看板を表に出すことは嫌なんです。

けれども宗教法人法という法律を国が作っていて、難儀なことに、こうした資格がなかったら仕事が出来ません。しょうがないから大倭教という名前をこしらえて宗教法人の資格は取っているんだけれども、その内容はいわゆる世間の宗教とは全然違う、そういう匂いや味は感じてほしいと思います。(つづく) 文責・編集部

「こだま」&「だま」

大阪府河内長野市 金澤 秀郎

『とおやまと』を見ていたら、会費1万円と書かれていたので、大倭会に入会します。何かしらご縁があるのでですね。なお(10月号では)字数の制限でカットした、寄稿文を寄せるに当たっての説明の部分を送付します。今後とも、よろしくお願ひします。(メールを要約)

70歳で考えていること

9月4日に、突然、電話がかかってきました。『とおやまと』に是非、寄稿してほしいとのこと。坂田洋美さんとのご縁で、禊会と一日紀行(文化行事)にそれぞれ1回だけ参加しただけの私が、何かを書くなんて、到底考えられません。即座に、「無理です」とお断り。「大倭どうこうでなく、何でも結構です」。その時ふっと、法主さんの笑顔が見えました。「わかりました。引き受けさせていただきます」ということで、厚かましくも、書かせていただくことになりました。

坂田洋美さんとは、川口由一さんの漢方講習会などで一緒にさせていただき、深いご縁をいただきました。その坂田さんから、様々な本とともに機関紙『とおやまと』が送られてきました。何気なく読ませていただくと、法主矢追日聖さんの言葉に引きつけられました。インターネットで『とおやまと』を検索すると、なんと、2001年12月号からPDFが掲載されているではないですか。それから毎日、毎日、一冊ずつ読んでいきました。そうすると、法主様の言葉だけではなく、ハンセン病との取り組み、鶴見俊輔さんの講演、大倭あすか苑などの福祉施設の設定経緯、人間としての生き様を描いた寸草など、面白くて、面白くて、到頭最新号まで読んでしまいました。

その中で、私が一番影響を受けたのは「みんな仲良うせい」という言葉でした。人間が生きてく中で「最も素朴で最も難しい課題」だと思っています。今回は、この言葉の意味を私なりに考えてみたいと思います。私は、小さい頃から、自分の外の出来事にはあまり興味がなく、自分の内のことを書いてある書物を好んで読みました。大学も何かを考えるだろうと、文学部の哲学科に進学しました。亀井勝一郎の著作から親鸞を知り、『歎異抄』に魅了されました。この頃から今までずっと、宗教に、いや、宗教哲学に一番、私はじっくりいくものを感じていました。宗教では、「信仰」の問題が重要視されますが、元来霊性を持たない私にとって、ただ単に神や仏を信仰することは考えられませんでした。大学の4年生になって、卒論を誰にするかということになったとき、あの難解な西田哲学を選びました。読んで、読んで、読んで、読んで、わかるのです。西田幾多郎が好きなのです。細かいことはわからないのですが、全体のことがわかるのです。西田が言っていること

が真理であると確信するのです。そんな私に、「靈性」が発露される機会が訪れます。2011年4月13日に家内を乳ガンで亡くしました。6年間の闘病生活でつらい抗がん剤治療に愚痴もこぼさず、素晴らしい死に様でした。

じんずうりきによぜ

「神通力如是」の真意をさぐる 第四回 大倭教の源流にさかのぼって

今回の原文も前回(本紙9月号)の続きで、「同日」というのは昭和16年11月7日のことです。前回に続いて倭姫が奇稲田姫に対して礼を尽くして挨拶する様子が描かれています。神楽、手舞、唱題、合掌など手順を踏んで恭しく挨拶する様は、靈界における奇稲田姫の並々ならぬ位の高さを印象づけられます。註④でも述べられているように、「君が代」の「君」は、ここでは鶏の杜(大倭神宮)に坐す奇稲田姫のことを指しているのです。「神通力如是」において「奇稲田姫」は日本民族の元初祖霊として決定的な役割りを果たしています。次回はいよいよ奇稲田姫ご自身が登場して、その思いを語られます。(三人の会)

原文

同日、午後七時、於鳥見庄山

「ナム、ミヤウ、ホーレン、ゲキヤウ、々々々、、、」神楽手舞を終つてから合掌して口を叩く、次で両手を膝に置き、再び合掌して唱題、次で手舞、神楽。「ワレコソハーヤマトヒメ^後今シバシ

この時、私は人生で初めて「悲しみ」を知りました。本当に大事な人を失ったときの「悲しみ」「悲哀」。この「悲哀」は、内にはかり向いていた自分を外の世界に導きました。恥ずかしながら、やっと、他人の苦しみ、悲しさが少しわかるよう

になりました。

〔注〕西田哲学は、「悲哀の哲学」であるといわれています。奥さんとともに多くの子ども(5人くらいかな)を亡くしました。本人も、「悲哀」が哲学の始まりだと述べています。

ノ間、オン前ハイシャク仕リマス」膝^②より手を延べ深禮、合掌して唱題、神楽手舞、おもむろに禮拜、合掌、手舞、拍手しばし。

「アーアーアーアー」両手を延べて拝す。「ナム、ミヤウホーレンゲキヤウ、、、」題目にて手舞。「アーアーアー」題目。「アーアーアー」

「オーヤマトトビ^後ノモリ^杜、アナ、メデタヤナーメデタヤナークニシズメマス^③カミ、イマスチ、オーヤマト、ヒダカミノクニ、トビノモリ、、、キ^④ミーガ^代ーハーイーク^幾チヨマーデーモ^{千代}ーイーヤーサーカー^糸エー、ターケー^⑤ノ^竹ノーゾー^園マーツ^津ーヒ^生ノモト^本ーメデターヤーナー」
「吾^⑦レ^{サキ}前^日ノ世ニ於テ、大倭鶏杜、大倭鶏杜、奇稲田姫命、才仕へ致シシモノナリ。其ノ縁ニヨリ、コノ度^⑧コノ世ニ於テ、

コノ有難キ、コノ役目、嬉シクオウケイタシマスル。(合掌、慎シム形)フツツカナル身ナレバ何卒、ナサケヲモチテオン恵^⑨タレサシ下サレマセ。(おもむろに拝す)ナム、ミヤウホーレンゲキヤウ(可愛い声に変わる)、両手をつき拝す。

「オンマへ、ケガシ失禮仕リマシタ、オイトマチヨザイイタシマス」



註釈⑤にある「竹の園」(大倭神宮、鶏杜)

平成6年7月13日

(井手泉写)

註 釈

- ①合掌して口を叩く 倭姫が憑依している状態の妙月が、日聖の正面に正座して合掌したまま、人差指で震える様に自分の口先を軽く叩くような仕種。
- ②膝より手を延べ深禮 妙月が日聖にむかい正面に正座して、両膝にある手を前にすべらせ、畳に上半身を投げ出す形で禮(礼)をしている。仏教やチベット仏教等で見られる五体投地の様に、神聖なるものへの敬虔な礼の姿勢であり、靈動のおきた人がよく法主の前でおこす現象(動作)である。
- ③クニシズメマスカミ、イマスチ、オーヤマト、ヒダカミノクニ 「国鎮めます神、居ます地、大倭日高見の国」ということであるが、ここでいう「大倭日高見の国」というのは「太陽が高くかがやく国ということ、日本国の美称である。」(小学館『日本国語大辞典』)
- 他にも「日高見の国」には古代の蝦夷(えぞ)地の一部。北上川の下流地方、すなわち仙台平野に比定(『広辞苑』)の意もある。
- 日本国を鎮めている神が大倭神宮にはおられるということであり、この地が日本国の真の祖廟地であることを意味している。
- 昭和20年8月15日に立教された大倭教の聖歌のうち、「くにのもと」第4節に「金鶏輝く日高見の鳥見と高千穂あふやまと…(後略)…」がある。この聖歌には「矢追妙月 作歌」とあるが、これも妙月の神懸かりでの作歌である。
- ④キーマーガーヨーハー 「君」は人を敬い親しんでいる。あるいは君主の寿命ないし栄える時(『広辞苑』)
- 「トビノモリ、、、、、、キミガヨハー…(後略)…」とある原文の流れから読み解けば「キミ」は奇稻田姫命をさしている。
- 「君が代」の「君」について、法主は「キ」は伊弉諾(いざなぎ)の「ぎ」、「ミ」は伊弉冉(いざなみ)の「み」からきているとおっしゃったことがある。
- ⑤ターケーノソーノヤーノ、イーローマーシテ 「竹の園生の色増して」の「竹の園生」とは『古語大辞典』(小学館)によれば「前漢の文帝の皇子、梁の孝王が庭園に竹を植えて竹園と呼んだことから皇族の雅称として使われていた。」とあるが、ここでは国鎮めます神のいる地、大倭日高見の国、鶏杜に育つ竹の園のことである。(前頁に写真)
- ⑥アーマーツーヒノモトメダーヤナー 天津「つ」は所属を示す助詞で「の」に同じ。神つ風、遠つ祖(『平凡社大辞典』)
- 奇稻田姫命からはじまる尊い日本はめでたく、すばらしい、との意である。
- ⑦吾レ前ノ世ニ於テ…(後略)… 倭姫の前世にあたるどなたかが、神宮(大倭鶏杜)におられる霊界の奇稻田姫命にお給仕していたのだろうか。
- 古史によれば天照大神を齋き祭り諸処の土地を巡り、伊勢の地に落ち着いたといわれる倭姫が奇稻田姫命に仕えていたというのは興味深い。
- この事の参考として『おおよまと』紙平成26年8月号の、〈遺稿「大倭神宮伝承の紀後編」下〉より、法主の追記の部分の後半を引用しておきたい。
- 「第一代神武朝から第九代開化朝まで歴朝、大倭大魂大神と天照大神の二柱の大祖神を殿内に奉斎してあったものが、第十代崇神朝になって悪疫流行して世が乱れ、その原因はこの二柱が同床であるからだと思われ、畏れて殿外に遷された。一方は倭の市磯邑に、一方は倭の笠縫邑に遷座奉斎されたことになる。
- ところが、活目入彦五十狹茅命こと第十一代垂仁天皇が即位されると、その二十五年三月、神懸りである皇女倭姫命を豊鍬入姫命に代わって奉祀させられた。
- 大倭の大祖神の御神託により倭姫命は勅命を奉じ鎮座の地を求めて、天照大神の御靈代を持って、菟田の筏幡に詣られ、更に近江・美濃地方を廻り、鎮座の地を変わられること十五回に及ぶ。
- 神慮のまにまに正に流浪の旅の末、伊勢の地に至り大宮を渡遇の地に建設あつて、ここに天照大神を奉祀し五十鈴宮と称した。今の伊勢内宮がこれであるようである。」
- ⑧コノ度コノ世ニ於テ…(後略)… 後に妙月が前世に於いて倭姫であったことが語られる。
- 今回法主の妻として、その妙月に転生した倭姫が新しい使命を与えられた喜びを語っている。
- ⑨可愛い声に変わる 妙月に憑依している倭姫の神語りの声から、妙月の普段の声に近づいたものではないか?
- 見たもの、聞いたものを忠実にあらわそうとする法主の考古学的思考と表現の緻密さを感じられる。
- ⑩オイトマチヨザイイタシマス おそらく「オイトマチヨウザイイタシマス」ということだと思われる。「ウ」は書きもらしか。また、ネットでは吉野地方や和歌山弁で「だ」行と「ざ」行の発音の区別がつかないことがあるとの情報を検索できた。紫陽花邑育ちの人にもよくあったし、奈良のこの辺りでも同じだったのだろう。
- あるいはその影響があるのだろうか。

寸 莎

第139回

あつし
三宅 淳之さん

思い込んだら一直線

今回登場していただくのは三宅淳之さん。京都市伏見区に住まいし、「訪問マツサージ師」を生業に日々忙しい好漢である。現在、大倭を訪れる機会がさほど多くもないが、その第一回目のご縁は意外に古い。平成元(1989)年の夏、19歳だった三宅青年は建つてすぐの新拜殿で法主様と対面している。その折、故郷岡山から大阪に出て来たばかりで、短髪姿の純朴な三宅さんを見て、法主さんは泣かれたという。恐らくは戦前、兵役検査で甲種合格をし、その後戦争で亡くなっていった何人かの友人達を想い出している、矢追隆家としての涙であつたらしい。

その初めての出会いの時、「腹を立てせるな・優越感をもつな・劣等感をもつな。これをあんたのお経にすればいい。別な言葉でいえば、人を恨むな。剣でいえば、人を殺すな。あんたはおじいちゃんの気質をうけついでいるので、一本通しきつてしまいがちや。引くところは引く、押すところは押す。武道と同じやで」という言葉をいただいた。

さらにまた「武道も治療も同じなさんやで」「真の宗教家なら、社会の一番底辺にいるべきだ。乞食みたいな」「ここに来ても何のご利益もないんやで。真面目に働くのが一番の先祖供養や」「どんな宗教でも、それを信仰しはる人の心が尊いねんから、その人をくさす必要もないし、大倭が結構やからと引つ張る必要もないんで」等々の言葉を、心の安らぎとして思い出すという。

三宅さんは昭和44(1969)年11月5日、岡山県後月郡(現井原市)芳井町で生まれた。父・恒夫さんは平日は自動車部品工場で働き、休日は畑仕事、山仕事に携わる働き者だった。看護師の母・和恵さんとの間の長男で、姉の智美美さん、祖父・豊三郎さん、祖母・信子さんとの6人家族であつた。

仲良し家族と、山あり川ありの豊かな自然のもと、奔放で自由な野生児として育つた。中学に入ると剣道部に所属。部活以外にも自宅の一室を改造した「練習室」で1日に3千〜1万回の素振りを、高校卒業まで6年間も繰り返したというから、並ではない。その間、町の公民館の図書室で見つけたという山岡鉄舟著の『山岡鉄舟剣禅話』という書物に、「どはまり」したという。剣道から剣術へ、新たな世界を探る旅の始まりとなった。

高校卒業後、大阪の「東洋歯科技工学院」で学び歯科技工師となる。そして大阪の歯科技工所で1年間ほど働くが、仕事上、アスベストを扱うのも嫌でやめた。その後、様々な仕事をしながら、この間も一貫して武術や身体健康法の世界を巡っていく。

語学学校の事務員、マクロビオテックで名高い「正食協会」の社員等を経て、平成8年、京都市七条にある「仏眼鍼灸治療学院」で東洋医学を3年間学んだ後、国家試験に合格し、「訪問マツサージ師」として一本立ちする。同じ頃、36歳にして博子さんと結婚、一粒種の惇君は今年中学1年生となった。

「訪問マツサージ師」とは?と尋ねると、「歩行困難状態と医師が認めた方の所に赴き、医療保険を使って治療を行う仕事」と答えてくれた。そしてその実態は、平成7年8月号『おおやまと』紙に載つた三宅さん自身の文章によると、へ患者さんのお宅を訪問し、患者さんが寝たきりにならないようにマツサージや機能訓練をする毎日です。ただ訪問先の患者さんは持病のある独居の高齢者、老々介護のお宅等があるため、実際にはそれだけにとどまりません。脱走した飼ひ犬の確保、網戸の張り替え、トイレの鍵の修理、エアコンの掃除、オオスズメバチの巢の除去、自助具の作成、ムカデ駆除、詐欺対策、補助犬の散歩、障がい者就職支援、防犯装置の作成設置、お花見外出支援等の多岐にわたります」とあり、その多忙さと共に三宅さんの生き様が見えてくる。18歳で故郷を離れ、様々な試行錯誤を重ね、己自身の道を求め続けた旅は、まだなかばではあるが、「病気の方々の苦しみに寄り添い、その方々を守護して下さっている霊人にも喜んでいただけるような顕幽にわたる仕事にしたい」と語る三宅さんの、社会の一隅を照らし続ける、はるかな旅の無事を祈りたい。(聞き手 林修三)



あじさい日記

10月11日 午後3時頃、突然でしたが貴志真理さん(東京都杉並区)がフランス在住の娘さんとその婚約者カリフ・チュウーベさんと共に来邑。杉本順一さんと歓談されました。

10月13日 拝殿において視会。

10月15日 大倭神宮月次祭。

10月22日 午後、交流の家コンサート開催。心配された天気もよくなり、交流の家の野外でフォーク歌手・中川五郎の熱唱。ゲスト出演者やスタッフと合わせて100人ほどが来場、盛況でした。五郎さんは翌日から生駒や桜井でライブとのこと

で交流の家に一泊。報告記事は次月号の予定。



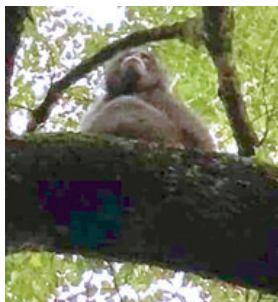
10月23日 大倭大本宮月次祭。

この日は昭和37年10月23日の法話CDをお聞きしました。(平成18年10月号『おおやまと』に「本当の宗教の味とは……」として掲載分)。

10月27〜28日 大倭会文化行事。前後は雨となりましたが、この2日間は好天の下、紀伊半島一周、丹敷戸畔の慰霊等に参加者30名。後日、詳細報告。

11月6日 大倭神宮月次祭。夜、大倭会館で邑倭の会。

夕方近く大倭印刷の前の道路



矢追明昌さん撮影

でサルを発見、素早く拝殿方面の山へ入った。その後の目撃情報をたどると、ぐるっと包括支援センターの裏側に走り、空地に干してあった落花生や柿を食べ、須賀の道を駆け上った、らしい。その間1時間足らず。

日聖祭(案内) 令和元年12月23日(月)

大倭七十六年 元旦

法主日聖師の御誕生を記念する祭典

○午前10時、法主様の奥津城に参拝。

午前10時30分より大倭大本宮拝殿において日聖祭がとり行われます。

○午後1時より、大倭会館で祝賀の会が催されます。

直会弁当を頂きながら、直会演芸会として、隠し芸など披露して頂ける方を募っています。

楽しいひと時を共にすごしましょう。

●12月15日まで受け付けています。

◆演芸会担当 中島武宣(大倭印刷内)

TEL 〇七四二-四四一〇〇〇-一
FAX 〇七四二-四四一〇〇九-一

あんない

*金鶏祭(大倭神宮)
12月4日(水) 午後2時より大倭神宮にて。

金鶏祭については、『やわらぎの黙示』の「日本精神の源流―長曾根邑のすめらみこと―」等

を読み、改めて「和の光」の心を自分のものとしたいものです。

*月次祭(大倭神宮)

12月6日(金) 午後2時より大倭神宮にて。

*大倭会主催第611回視会

12月8日(日) 午前9時より

「掃除みそぎ」として、大倭紫陽花邑境内の大掃除です。昼食は用意されます。どうぞよろしくお願ひ致します。

これに先立ち8時より大倭墓地の大掃除が行われます。

*月次祭(大倭神宮)

12月15日(日) 午後2時より大倭神宮にて。

*日聖祭(大本宮拝殿)

及び直会演芸会

12月23日(月)

大倭元旦。

上の「案内」をご覧下さい。なお念のため、今年から平日になります。

*大倭神宮境内・

周辺大掃除

12月29日(日) 午前9時より

有志の皆さんはご参加下さい。昼食は用意されます。

8) (8)